View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai Gaidai University Repository

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事 (1903-1939)（上）

著者	井上 紘一
雑誌名	研究論集
巻	91
ページ	267-280
発行年	2010-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006170/

関西外国語大学 研究論集 第91号（2010年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.91 (March 2010)

日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（1903－1939）[i)]（上）

井　上　紘　一

要　旨

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866－1918）は、北東アジア先住民研究の草分けのひとりである。日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事は12件が確認されている。本稿はそのすべてを忠実に翻刻・収録する。

「記事１～４」は、ピウスツキらが行った1903年の北海道アイヌ調査にかかわり、「記事５～９」は、彼が1906年にヨーロッパへ戻る途上で、日本に７ヵ月余り滞在した際の報道である。

本誌92号に掲載される「記事10～12」はピウスツキ没後の報道。彼が1905年にサハリンを去るとき島に留まることを余儀なくされた、未亡人と遺児をめぐる物語である。

ポーランド人ジャーナリストのヤンタ＝ポウチンスキとピスコルは、ブロニスワフの実弟であるユゼフ・ピウスツキ元帥の指示で、日本領「南樺太」における「遺族」の探索を計画したと報じられている。前者は1934年に遺族と首尾よく会えたが、後者の方は1939年に相次いで出来した政治的・軍事的大事件に妨げられて、計画は実現しなかったらしい。

キーワード：ブロニスワフ・ピウスツキ、日本滞在、新聞報道、伝記資料

解　説

ブロニスワフ・ピウスツキ（Bronislaw Pilsudski、1866－1918）は、リトワニア生まれの優れた民族学者である。ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、少壮期の19年をロシア領極東で過ごすことを強いられた。その間、北東アジア先住民研究に従事して、この分野では先駆的な研究成果を残したが、ヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第１次大戦下のパリで客死した。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が照射される契機となったのは、1979年春の札幌における「ピウスツキ業績復元評価委員会」[ii)]の発足である。同委員会は、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蝋管を日本に借り出し、最先端の科学技術を駆使して録音音声を再生する事業を進める[iii)]とともに、散逸した研究業績を博捜して然るべく評価し、併せてピウスツキの伝記資料も収集した。その成果は1985年に札幌で開かれた第１回ピウスツキ国際シンポジウム[iv)]

で報告された。その後、1991年には第2回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク[v]、第3回は1999年にポーランドのクラクフとザコパネ[vi]と、いずれもピウスツキ所縁の町で開催されている。

ピウスツキが残した既刊・未刊の研究業績は、研究の場が国際化する過程で形成されたネットワークのなかで全貌がほぼ究明されて、『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』[vii]としてムトン・デ・グロイター社から刊行中である。ピウスツキが収集した民族資料の図録[viii]も既に上梓され、さらにはピウスツキ研究に特化した逐次刊行物[ix]までも発行されている。かくて「委員会」が掲げた諸課題は、概ね達成されたといえよう。

残された課題は評伝の執筆である。ピウスツキは、数奇な運命に弄ばれて世界の各地を転々と遍歴し、地球一周を「ほぼ」[x]果たした旅人であった。彼の生涯は、幼少年時代の「リトワニア期」(1866－1885)、逮捕・流刑で中断された短期遊学の「ペテルブルグ期」(1885－1887)、徒刑囚として過ごした「サハリン期（1）」(1887－1899)、博物館勤務の「ウラヂヴォストク期」(1899－1902)、研究者として滞在した「サハリン期（2）」(1902－1906)、欧州帰還を果たして以降の「ヨーロッパ期」(1906－1918）の6時期に区分される。当然至極ながら、彼の全生涯を対象とする評伝を擱筆しえた者はまだいない[xi]。そこで、澤田和彦埼玉大学教授と私は2007年、日本学術振興会から科学研究費補助金を得て、かかる評伝を執筆する国際共同研究プロジェクト[xii]に着手した。各時期の専門家全15名からなる国際的執筆陣は目下執筆活動に邁進中、『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』は2010年5月に上梓される予定である。

ピウスツキは「サハリン期（2）」に当たる1902年から1906年にかけて、日本を4度訪れたことが判明している[xiii]。初来日は1902年、サハリンのマウカ（真岡、現ホルムスク）からデンビー商会の漁船に便乗して函館に来航、8月6日から30日（露暦[xiv]）まで滞在した[xv]。1903年の第2回来日では、6月20日から9月24日（露暦）にかけて北海道に滞在し、ロシア帝室地理協会がヴァツワフ・シェロシェフスキのために組織した北海道アイヌ調査に、アイヌ語・アイヌ文化の専門家として参加した。この折は、彼がロシア語を手解きした樺太（対雁）アイヌの千徳太郎治が日本語通訳として同伴している[xvi]。第3回は日露戦争直後の1905年9月から11月にかけて、日本軍占領下の南樺太を経て神戸に至る駆け足の旅であった。樺太では東海岸相浜を訪ねて妻のチュフサンマや長男助造[xvii]と会い、妻子を連れての帰国を試みるも、妻の叔父バフンケアイヌの峻拒に遭って断念する。神戸ではニコライ・ラッセルの事務所を手伝った。第4回の来日は1905年12月後半から翌年8月3日まで、7ヵ月余りの長逗留となる。ピウスツキは当初、1906年3月にはヨーロッパへ向け離日してリトワニアへ戻る計画だったようだが[xviii]、東京では6ヵ月、長崎にも1ヵ月弱滞在した。7月30日、大北汽船の「ダコタ号」に乗船して長崎を出発したピウスツキは、神戸を経由して横浜に寄港（8月2日)、翌3日に同港を発ってシアトルへ向かった。

本稿に収録される新聞記事は、12件中9件が「サハリン期（2）」の来日にかかわるが、日本におけるピウスツキの動静が日付を伴って提示されている。具体的には「記事1～4」が第2回の来日、「記事5～9」は第4回の来日に関係する報道である。「記事1」と「記事3～4」は変哲もない乗船者名簿に過ぎぬとはいえ、ピウスツキが「所与の時に所与の場所」にいたことを立証する、伝記情報としては珠玉の歴史資料にほかならない。加えて「記事2」では、シェロシェフスキらが平取で撮影した映写フィルムの内容[xix]にまで言及している。最後の来日では、ピウスツキが既に北東アジア先住民研究者として遇され（「記事5～7」）、真摯なジャパノロジストとしても面目躍如である（「記事8～9」）。

ピウスツキがパリで客死して半年後の1918年11月11日、亡国ポーランドは悲願の国家再興を果たし、独立運動の立役者であった実弟のユゼフ・ピウスツキが、共和国初代元帥として国家首席に就任する。「記事11」とその種本である能仲文夫著『北蝦夷秘聞』によると、ピウスツキ元帥は「十年前」(即ち1924年)、樺太に在住する「兄の遺族」の探索をパテク初代駐日ポーランド全権公使に命じたが、不首尾に終わったとある。その後10年の空白が何を意味するかは不詳ながら、ヤンタ＝ポウチンスキは1934年1月、南樺太東海岸の白浜においてブロニスワフ・ピウスツキの遺族を「発見」したのである（「記事10～11」）。

「記事12」は、頗る興味深い内容ながら辻褄の合わぬ事柄も散見され、当初は捏造記事ではないかとも疑って収録を躊躇した。しかし、ビスコルという人物を調べていくと、筋金入りの愛国者で辣腕のジャーナリスト、しかも日本で下獄した最初のポーランド人であった事実さえ判明した。事実関係に関する管見は、記事篇の脚注に記したからここでは繰り返さぬが、1939年5月以降相次いで出来したノモンハン事件、独ソ不可侵条約、第2次世界大戦の渦中に身を投じたビスコルには、ブロニスワフの遺族を訪ねて南樺太へ赴く余裕など、到底ありえなかったであろう。

評伝執筆に際しての新聞報道の重要性は、改めて力説しておきたい。日本におけるジャーナリズムの草創期に端なくも際会したピウスツキの訪日は、9件[xx]の報道記事を産出した。しかしながら、記事の内容を鵜呑みにすることは差し控えねばならない。まず、取材者の（とりわけ外国の固有名詞をめぐる）聴き違え、誤解、勉強不足などが指摘されるが、本稿では必要不可欠の案件に限って脚注を施した。次に、ピウスツキ本人の個人情報に関して、既知の事実とは背馳する記載も散見される。それは「記事10～12」において顕著であるが、殆どは種本に想定される『北蝦夷秘聞』にまで遡及する情報であるから、原則として不問に付した。なお、新聞記事の転載に際しては、「原文のまま」を極力心がけた。

最後に、新聞記事12件のすべてについて、私が第1発見者ではないことを明記しておきたい。本稿を草するに当たり、河野本道、澤田和彦、山岸嵩の3氏からは記事に関する情報を（一部についてはそのプリントコピーまでも）賜った。特に御芳名を記してお礼申し上げる次第であ

る。また、編集中・編集済みの記事稿に目を通して、貴重なコメントを寄せてくださった井上久仁子、澤田和彦、柚木かおりの各氏にも感謝申し上げたい。とはいえ、あらゆる瑕疵への責任は偏に私が個人として負うべきものである。

注

i　本稿は紙幅制限のため、本誌91号と92号に分割して掲載される。

ii　Committee for Restoration and Assessment of B. Piłsudski's Life and Work. 但し、同委員会の正式名称は、頭文字を連ねた略称の（英語で「サイコロ博打」も意味する）CRAP であった。ある春の宵、北大文学部附属北方文化研究施設の黒田信一郎助教授と井上紘一助手の間で交わされた酒席での「密談」が、その濫觴だったからである。CRAP はやがて文理融合型の国際的学際研究組織へと発展して、1981年以降は、頭に International を冠して ICRAP を名乗った。

iii　1983年７月札幌に到着したピウスツキ蝋管の音声再生作業は、北大応用電気研究所の朝倉利光教授を中心とする工学チームが推進した（朝倉利光、伊福部達（編）『ピウスツキ録音蝋管研究の歩み　昭和58年―昭和61年』北大応用電気研究所1986年刊）。

iv　「ピウスツキ蝋管とアイヌ文化」と銘打つ札幌シンポジウムは9月16－20日、北海道大学国際交流会館で開催された（*Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*. Sapporo: Hokkaido University. 1985）。

v　サハリン州立郷土誌博物館は10月31日－11月２日、「B. O. ピルスツキ――サハリン諸民族の研究者」と題する国際会議を開催した。ピウスツキ生誕125周年に当たる最終日には、ピウスツキにとって「初の石像」の除幕式が、博物館の前庭で挙行された。会議の報告書は以下の通り。 Сахалинский областной краеведческий музей, *Б.О. Пилсудский — исследователь народов Сахалина* (*Материалы международной конференции. 31 октября – 2 ноября 1991 г. Южно-Сахалинск*). тт. 1-2. Южно-Сахалинск (1992).

vi　ポーランドで開かれた第３回会議のテーマは「ブロニスワフ・ピウスツキと二葉亭四迷」であった（A.F. Majewicz and T. Wicherkiewicz (eds.), *Bronislaw Pilsudski and Futabatei Shimei – An Excellent Charter in the History of Polish-Japanese Relations: Materials of the Third International Conference on Bronislaw Pilsudski and His Scholarly Heritage* [*Linguistic and Oriental Studies from Poznań*. Monograph Supplement 7]. Wydawnictwo Naukowe Uniwersytetu im. Adama Mickiewicza w Poznaniu. 2001）。古都クラクフから保養地ザコパネへ会場を移し、その後のタトラ山地へのポストコングレス・エクスカーションも含めて、８月29日から９月７日までの長丁場であった。

vii Alfred F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski.* Vols.1-2 (1998), Vol. 3 (2004) [*Trends in Linguistics*, Documentation 15—1, 2, 3]. Berlin and New York: Mouton de Gruyter. 3巻までが既刊、間もなく第4巻が上梓され、全7巻を予定している。

viii SPb－アイヌプロジェクト調査団（編）『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』（日露英3言語併記版）東京：草風館（1998）；ヴラヂスラフ M. ラティシェフ、井上紘一（編）『樺太アイヌの民具』（日露英3言語併記版）札幌：北海道出版企画センター（2002）。

ix 代表的事例として2誌を掲げる。（1）サハリン州立郷土誌博物館附置ブロニスワフ・ピウスツキ遺産研究所の発行する『研究所通報』（*Известия Института наследия Бронислава Пилсудского.* № 1-13. Южно-Сахалинск）—1998年に1号が刊行され、2009年発行の13号までが既刊；（2）井上紘一が1999年に創刊した欧文誌 *Pilsudskiana de Sapporo* [Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University (1999-2002); Saitama: Saitama University (2008-2009)] —6号までが既刊（但し、3号以降は澤田和彦教授との共編、第4号は未刊）。

x ピウスツキの地球一周を阻んだのは、三国分割下のポーランドを走るオーストリアとロシアの国境線であった。1906年にヨーロッパ帰還を果たしたものの、ロシア帝国に併合されていたリトワニアへの帰郷は、遂に叶わなかった（拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」45－46頁）。

xi とはいえ、昨年上梓されたラティシェフ氏によるピウスツキ伝『サハリンにおけるブロニスワフ・ピウスツキの生活：伝記試論』は、「サハリン期（2）」までを叙述する作品であるが、最初の本格的な評伝である（Владислав М. Латышев, *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского. Пролегомены к биографии.* Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство. 2008）。

xii 2007－2009年度基盤研究（B）「ブロニスワフ・ピウスツキの評伝執筆のための実証的研究」（研究代表者：澤田和彦 埼玉大学教授）。

xiii 沢田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」145頁。「日本暦」は、澤田教授がピウスツキの日本滞在を精査された結果を取りまとめた年譜であるが、記載事項の各々に出典が提示され、参考文献も完備している点が高く評価される。なお、「日本暦」は増補・改訂版が、ロシア語版・英語版とともに、澤田教授の科研報告書に再録され（澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシアの文化交流に関する実証的研究』さいたま：埼玉大学教養学部、2007年刊）、また邦語版と英語版は、われわれのホームページ Pilsudskiana de Sapporo（URL:http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/inoue/TOPF.htm）でも公開されている。

以下の記載は概ね「日本暦」に拠っている。

xiv ロシア帝国で採用されていたユリウス暦のこと、ロシア革命後の1918年まで行われた。露暦を西暦へ換算するには、19世紀で12日、20世紀では13日を、露暦年の日付に加算されたい。

xv ピウスツキはこの函館行を、マウカからコルサコフへ赴くための緊急避難措置として選択した。友人のシュテルンベルグへ宛てた手紙に、この旅は「無断・無賃（зайцем）」の渡航であったと記しているから、密航に近いものであったろう。したがって、新聞種になるようなことは周到に避けたのではなかろうか。

xvi 拙稿「B. ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」。

xvii サハリン滞在中のピウスツキは1903年頃、アイヌ女性チュフサンマ（別名シンキンチョウも伝えられている）とアイヌ式の結婚式を挙げ、1男1女をもうけた。「記事10－12」で紹介されるように、長男が木村助造、長女は木村（結婚後は大谷姓）キヨであるが、キヨはこの時まだ母の胎内にいた。

xviii ピウスツキは1906年2月8日、『東京朝日新聞』の記者に「本月中［即ち2月中］を日本の研究に費し、一度故郷の波蘭に歸り、夫より再び樺太に渡りて引續き人種學上の研究に從ふ」予定と語っている（「記事7」）。

xix シェロシェフスキは自らの旅行記『毛深い人たちの間で』（1927）のなかで、彼らは映画撮影機を携えており、彼自身が撮影を担当したと記すものの、撮影対象についての記載は頗る乏しい。この時の記録フィルムは目下行方不明であるから、「土人の熊送り、舞踊の類を活動寫眞に撮影し」たという記載（「記事2」）は頗る貴重である。

xx 当該期間（1903－1939年）に報道されたピウスツキ関係記事は、収録した12件以外にもありうるであろう。関連情報をお持ちの方がおられたら、御一報いただけると幸甚である。

I. ブロニスワフ・ピウスツキに関する記事

記事１.『北海タイムス』第4811号（1903［明治36］年８月８日付）

●室蘭船客[1)]

（四日出帆 玄海丸）函館行 札［幌］ピーエ、/ 旭川木下直次郎、函館□田廣三、青薫、渡□陛□少尉▲青/ 森行 八角陸軍中尉、早坂陸軍監督、札幌森田最中（五日入/ 港 肥後丸）▲函館より 道廳田村信吉、濠洲三ツタコール、/ 江差堀内祥治、露國セラセフスキー、ピルフスキー[2)]▲青森/ より 道廳伊吹槍治、仲陸軍少尉、札幌城戸熊次郎（仝日出/ 帆 肥後丸）▲函館行 小樽田中武右ヱ門、函館新津林太郎、/ 大串平八郎▲青森行 東京山本粂四郎、福原榮太郎、札幌□/ □縦太郎、中川半三郎、小樽斎藤誠□郎（仝日直行 東海丸）/ ▲青森より 東京佐藤謙三、小樽柿木實□郎、兵庫小田菊助/ 吉見定一郎▲青森行 札幌北山一太郎、厚田佐藤嘉七（六日/ 入港 薩摩［丸］）▲函館より 飯尾海軍少佐、太田海軍大主計、/ 高瀬根室支廳長、小寺御料局技師、東京市崎謙吉、桑田豊/ 蔵▲青森より 谷村陸軍監督、小倉仝監督、札幌松丸一郎、/ 手塚□三郎、東京田中原太郎、榊原佐吉（仝日直行 陸奥丸）/ ▲青森より 道廳淺羽堅三▲青森行 小樽牧口考明、荒井幸/ 造、札幌桂宗佐、中川庄□郎、旭川桂恕惠、東京石黒五十二

記事２.『小樽新聞』第2900号（1903［明治36］年９月17日付）

●波蘭人の土人研究[3)]

１）記事の閲読には北大附属図書館蔵マイクロフィルム、ならびに北海道新聞社のデータベース（マイクロフィルムにもとづく電子化情報）を利用したが、作業は困難を極めた。下線による強調箇所以外は未定稿である。「□」は「空字」か「解読不能文字」を意味し、「太字・下線」を用いての強調は井上による。なお、以下すべての記事を通して、本文中の注記は「[ ]」により、改行は「/ 」でそれぞれ表示される。

２）「セラセフスキー」はポーランドの民族誌家・作家であるヴァツワフ・シェロシェフスキ（Waclaw Sieroszewski, 1858－1945）、また「ピルフスキー」はブロニスワフ・ピウスツキ（Bronislaw Pilsudski, 1866－1918）である。記事中に「露國」とあるのは、彼らがロシア帝国旅券を携えて来道し、北海道アイヌの調査に従事していたことによる。両名は日本語通訳の樺太アイヌ千徳太郎治とともに「肥後丸」にて函館を発ち、記事にあるように1903年８月「五日」室蘭港に到着した。恐らくは口頭で聴いたポーランド人の姓を、このようにかなり正確に書き留めてある事実には敬意を表したい。

３）記事はブロニスワフ・ピウスツキに直接言及していないが、アイヌ調査団の一員である「ウキスキー氏」が1903年９月15日には札幌に滞在していたことが、端なくも確認できる。調査団一行３名は、平取から札幌までも行動を共にしたと考えるのが自然である。

波蘭クワルフー[4]街/ に住むウキスキー氏[5]は[,]本道に於ける土人の/ 状態研究として來道[,]一昨日札幌豊平館に投/ 宿し[,]道廳に出頭して農園、博物館一覧の儀/ を願ひ出てしが[,]氏は日高國沙流地方に於/ て[,]土人の熊送り[,]舞踊の類を活動寫眞に撮影/ し[,]携帯し來りたる由

記事３．『函館公論』第1079号（1903［明治36］年９月17日付）

●人

▲本田康虎氏（二十銀行監査役）は一昨日青/ 森へ赴く/ ▲竹村利三郎氏（法學博士）は一昨日室蘭よ/ り來函/ ▲山田敬哉氏（憲兵曹長）同上/ ▲林忠夫氏（憲兵大佐）同上/ ▲薬師川常義（憲兵大尉）同上/ ▲池中弼德（憲兵大尉）同上/ ▲**ピシスートシキイ氏（露國人）同上**[6]

記事４．『函館公論』第1080号（1903［明治36］年９月18日付）

●人

▲林忠夫氏（憲兵大佐）來函中の處昨日青森/ へ向け出發せり/ ▲薬師川常義（憲兵大尉）同上/ ▲山田敬哉氏（憲兵曹長）同上/ ▲ハールス氏（米国人）は昨日青森へ行く/ ▲森信夫氏（北海道廳技手）は昨日釧路へ赴/ く/ ▲松永工氏（同技手）同上/ ▲デレツク氏（米国人）昨

４）この地名は恐らくポーランドの古都クラクフ（Kraków/ Cracow/ Krakau）を指すものであろう。「クワルフー」とは、とりわけ母音の平仄がよく合うからである。その当時、シェロシェフスキはクラクフにも在住し、ピウスツキは樺太に滞在中であった。

５）「ウキスキー氏」なる人物には、調査団長のシェロシェフスキ以外を措定することができない。彼はピウスツキ、千徳太郎治とともに函館・白老・平取と行脚を続けるも、日露関係がとみに険悪化してきた（３人はいずれもロシア国籍であった）ため調査の中断を余儀なくされ、札幌を経由して函館に戻り、それぞれの地元へ向けて出国した（Sieroszewski, *Wśród kosmatych ludzi*；拙稿「B. ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」）。なお、ピウスツキとシェロシェフスキの札幌滞在については、ジョン・バチェラーも日付抜きながら記録を残している（『ジョン、バチラー自敍傳』20章３「珍客來たる」）。バチェラーは、両名が「二[,]三日此處に居て函館へ參りました」と語り、ピウスツキは自宅に「少時泊りました」と述べ、また彼らの札幌出発に際しては「此の二人」を駅頭まで見送っている（同書289頁）。ところでピウスツキは９月15日に函館へ帰着する（「記事３」）から、両名は遅くとも同日早朝には、（本記事がシェロシェフスキの豊平館投宿を「一昨日」、つまり９月15日と報じているにも拘らず）離札せねばならなかったであろう。「投宿」は「14日チェックイン、15日朝チェックアウト」と解すべきであろうか。いずれにせよ、調査団一行の札幌入りも、９月12日頃に想定せねばなるまい。

６）ブロニスワフ・ピウスツキの筈である。「太字・ド線」での強調は井上による。彼は室蘭から函館へ「一昨日」、即ち1903年９月15日到着と記載されている点が注目される。なお、近刊書『函館市史　年表編』（2008）には同年「９月15日」の項に、「民族学者ピウスツキが来函する」（279頁）と記載されている。

日室蘭より來函/ ▲セロシユフンギ氏（露國人）は昨日室蘭よ/ り來函[7]/ ▲櫻井常太郎（仁壽生命保険株式会社員/ ）同上

記事５．『北海タイムス』第5533号（1906年［明治39］１月10日付）

●浦汐より二人の珍客

最近の便船[8]にて浦汐斯德よ/ り來朝したる二人の珍客あり。其一はビルドスキー[9]/ と言ひ、波蘭人にして十九歳の時國事犯の爲め/ 西比利亜に放流され、多くの日月を西比利亜、[か]む察加[10]、サガレン等に送くる内、文學の素養ありしを以/ つてアイヌ語の研究を試み、頗る造詣する所あり。/其の著述[11]を懐にして來朝し、日本に於て之れを/ 印刷に付して、日本の學者と共に之れを研究せん/ と欲する由。又た其の一人はマトヱエフ[12]と稱し、浦汐/ 及びニコリスクにて久しき以前より新聞紙を發行/ したるが、戰争中は中止し、今回再刊を試むるに付/ き、日本の寫眞其の他の材料を蒐集し、併せて印刷/ の設備をも日本に於て整ふる爲め來朝したる由に/ て。同氏は函館にて生まれ、非常の日本崇拝者にて、/ 開戰前露國の極東政策に反對し、之れが爲め發/ 行停止の厄を蒙むりたることも一再ならずと云ふ

7）問違いなくシェロシェフスキである。彼はピウスツキに二日遅れて「1903年９月17日」、やはり室蘭から函館着と報じられている。遅延の経緯は不詳。「太字・下線」での強調は井上による。往路同様、千徳太郎治に対する言及はないが、恐らくはピウスツキに同行したものと推測される。『函館市史　年表編』は同項に「17日、同じく民俗「sic」学者セロシェフスキが来函する」（279頁）」と併記している。

8）この「便船」がいつ、日本のどこに入港したのかは今なお不詳である。ピウスツキは友人のニコライ・マトヴェイェフ、その11歳の娘ゾーヤとともに、日露戦争終結後に日本へ向かうロシア船で浦塩をあとにした。ロシア資料によると、彼らの出国をめぐっては1905年11月末（露暦）、12月４日（露暦―グレゴリウス暦では同17日）の両説がある（沢田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」151頁）。ゾーヤの来日は重篤な脚部疾患の治療が目的であり、事実、福岡医科大学病院に入院して手術を受けている（前掲論文154頁、「記事６」も参照）。してみると、彼らは何を措いてもまず福岡へ直行したのではなかろうか。その観点から上陸港を絞ってゆくと、浦塩から至近という意味では敦賀、そして福岡に至近の門司の２港に落ち着く。その際『馬關毎日新聞』が「浦鹽よりの珍客」と題し、本記事とほぼ同一内容の「記事６」を同じ10日付で報じたのは示唆的である。ピウスツキは1906年「１月７日頃」東京に姿を現して、二葉亭四迷を訪ねている（前掲論文152頁）。

9）ブロニスワフ・ピウスツキ。

10）ピウスツキがシベリアやカムチャツカに滞在した事実はない。取材者の聴き違いであろう。

11）この「（露文）著述」は、上田将によって日本語に翻訳され、京華日報社の月刊誌に発表された（ビルドスキー「樺太アイヌの状態」『世界』1906年７、８月号所収）。この論文は、ピウスツキによるアイヌ研究の処女作である。「著述」の露文原稿は1907年に浦塩で公刊された。

12）ニコライ・ペトロヴィチ・マトヴェイェフ（Николай Петрович Матвеев，1865－1941）。ニコライ・アムールスキーという筆名の詩人でもあった。日本で生まれた最初のロシア人といわれ、ロシア革命後の1919年には日本へ亡命、神戸で生涯を終えた。

記事６．『馬關毎日新聞』第4439号（1906年［明治39］１月10日付）

●浦鹽よりの珍客[13]

最近の便船にて浦鹽斯德より來朝したる二/ 人の珍客あり。其一はビルドスキー[14]と稱し、波/ 蘭人にして十九歳のとき國事犯罪の爲め西/ 比利亜に放流され、**今茲に三十九歳の春を迎/ へ**、多くの日月を西比利亜、勘奈［?］察加、サガレン/ 等に送る中、豫て文學の素養ある者なりけれ/ ばアイヌ語の研究を試み、頗る造詣する所あ/ り。今ま其著述を懐にして來朝し、は、日本に/ 於て印刷に付し、日本の學者と共に之れを研究/ せんと欲するもの、由、**言語學、古物學者に/ 有益のものたるは深く自信する所なりと**。又/ 其一人はマイエエフ[15]と稱し、浦鹽及びニコリ/ スクにて久しき以前より新聞紙を發行した/ るが、戰争中は中止し、今回再刊を試むるに就/ き、日本の寫眞其他の材料を蒐集し、併せて印/ 刷の設備をも日本に於て整ふる爲め來朝せ/ しなりと。因にマイエエフは函館に生れたる/ にて、**數次到來し**、非常の日本崇拜者にして、開/ 戰前露國の極東政策に反對し、之が爲め發行/ 停止の厄を蒙りたること一再ならず。**今回は令/ 孃をも伴ひ來たり、福岡病院に入院せしめ、日本/ 博士の手術を受けしめつゝありと**[16]。**前者はセン/ トラルホテル**[17]**に投宿し、後者は長崎に在り、令/ 孃の全治を待て共に上京すべしと**[18]

13）当該記事は、「見出し」に小異が、そして内容にも若干の異同が認められるものの、「記事５」と同一の情報源にもとづくものである。本記事では「記事５」との対比で、内容に違いはないが記載を異にする箇所を「太字・一重下線」で示し、「新規」記載には「太字・二重下線」が施してある。両記事を仔細に検討すると、「記事６」の方が詳細で、より推敲された文章との印象が強い。しかし両記事が、片や北海道の札幌、片やは本州南端の下関から、同日付で報じられている事実を勘案すると、「記事６」は「原」情報というより、「当面は未発見」の原情報により近いヴァージョンと見做すべきであろう。想像を逞しうするならば、情報提供者は、「１月７日頃」以降在京したブロニスワフ・ピウスツキにほかならず、しかも原情報は、ひょっとすると二葉亭四迷という達意の通訳を介して、東京で成立したインタヴューの所産ではなかったろうか（脚注８、15、17、18も参照）。この推論に対して澤田和彦埼玉大学教授にコメントを求めたところ、二葉亭が通訳を務めたことも含めて「同意できない」との回答があった。

14）ブロニスワフ・ピウスツキ。「記事５」の「ビルドスキー」より正確である。

15）ニコライ・マトヴェイェフ。原情報では、恐らく「記事５」の通り「マトヱエフ」であったろう。この誤記は、「記事６」がマトヴェイェフ本人に対する直接取材の所産でなかったことを強く示唆する。

16）この「新規」記載は、あるいは下関にて挿入されたのかも知れない。

17）ピウスツキは1905年12月末か翌６年１月初旬、「東京築地」の「セントラルホテル」に止宿したことが判明している（沢田「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」151－152頁）。

18）文脈から推して「前者」はピウスツキで、「後者」はマトヴェイェフの筈である。マトヴェイェフがゾーヤの退院後に「上京すべしと」と、伝聞体で結ばれている件のひとつの解釈として、長崎に滞在のマトヴェイェフが情報提供者ではなかったこと、ならびに在京のピウスツキが取材された可能性、を措定することも許されよう。

記事７．『東京朝日新聞』第7000号（1906［明治39］年２月８日付）

●露国人類學者

人類學上比較研究の爲め今回來朝したる露/ 國人ピルドウスキー[19]氏に對し、理科大學人類/ 學教室にても種々に研究の便宜を與へら/ れ、再昨日は同教室の鳥居龍藏氏をして北豊島/ 郡西ケ原の貝塚へ案内せしめ、種々なる土器/ の破片、石器等の表面採集を試みられたり。/ 氏はまた熱心なるアイヌ研究者の一人にし/ て日毎に府下の骨董店を廻り研究材料を募/ 集中なるが、同氏は日本の石器時代種族とア/ ムール附近の石器時代種族とは近似の點少/ からず、又日本にても石斧を雷の斧といふが/ 如くアムール下流のギリヤーク種族にも同/ 様の稱呼ありといへり。尚同氏は本月中を日/ 本の研究に費し、一度故郷の波蘭に歸り、夫よ/ り再び樺太に渡りて引續き人種學上の研究/ に從ふ筈なりと。因に氏は十八歳の時に國事/ 犯人として幽囚せられ、九年の後樺太に逐は/ れてより、自由ある囚人として十二年間を同/ 地に送り、其間は看守附にて樺太内地及び黒/ 龍江畔を遍歴してアイヌ、ギリヤーク、オ/ ロツコ等の研究に從事し居たる人なり

記事８．『報知新聞』第10384号（1906［明治39］年３月９日付）

●日本婦人の研究

（波蘭人ピルスドスキー氏）

目下來遊中なる波蘭人ピルスドスキー[20]氏/ は、戰勝の光榮を永く青史にとゞめて我邦/ 名將勇卒の母なる日本婦人の研究をなさ/ んとて、昨今重なる婦人教育家其他に就き種/ 々質問する所あり。今某女史と氏との問答を/ 得たれば、左に之を摘記せんに、問「欧州各國/ の男女比較割合は、大約男百人に對し女百一/ 人を示して、近來男子中、學術研究の爲め若く/ は他の理由の爲め、獨身生活を爲す者非常に/ 増加せり、随つて女子が配偶者を得難くな/ れる模様なり。貴國にては左様の傾向はなき/ か。」答「我邦は未だ左程の事は無き様なるも、/ 年々男女結婚年齢の遅くなれるは統計の示/ す所なり。」問「然らば此等若き未婚の婦人は/ 何等の事業にか從事するや。」答「然り、生活問/ 題に關すると否とに係らず、若き婦人が專ら/ 獨立自活の途に就かんとするは、一般の趨勢/ なるが如し。」問「貴國に於て嘗て甚賤しま/ れたる穢多非人等の階級に向つて、如何に取/ 扱はれつゝありや。」答「我國に愛国婦人會な/ る團体あり。嘗つて藝者といふ醜業婦等/ 何等かの縁にて此の團体に仲間入りせし事、後に/ 至りて會員等の知る所となり、爰に、問題の/ 起りたる事ありしも、穢多新

19）ブロニスワフ・ピウスツキ。

20）ブロニスワフ・ピウスツキ。

平民の斯る問題/ の起りしを耳にせず[。]問「看護婦とならるゝ/ 婦人の多くは[、]何の目的に基くか[。]答「多くは/ 生活問題よりなるべし[。]問「貴國の青年女性/ は好んで如何なる種類の書を愛讀するや[。]答/ 「先ず文學書なるべし[。]問「上流下流何れの/ 社會の婦人に未婚者多きか[。]答「上流中流は/ 生活難に遠き為め[、]下流よりも結婚難多から/ ず[、]随つて未婚者も少きが如し[」]、云々[。]如 此氏/ は諸種の質問を放つて[、]日本の婦人を多方面/ より観察研究しつゝあり[。]尚本日も某々等二/ 三の女史と會見の約ありと

記事９．『北海タイムス』第5592号（1906［明治39］年３月20日付）

●外人の日本婦人研究

京橋區銀座通り二丁目洋酒店函館屋方にポー/ ランド人ビルスドスキー[21]と云へるあり[。]滞京中の目的/ は日本婦人の 研究 にありとて[、]朝野の才媛貴女を/ 訪問して次の如く質問を 試 みつゝあり

▲日本婦人が政府に向つて參政權を要求す/ るに至りし眞意▲世界各國の婦人に比して日/ 本婦人の優美なる理由▲日本婦人の結婚感/ 想▲日本婦人の職業問題に於ける意見▲一/ 般婦人の穢多又は非人に對する感情及び所/ 爲▲非人及び穢多社會の婦人の現状▲現/ 今日本婦人の教育程度に關しての意見

其他交戰中の日本婦人 活動 の 實況 、婦人界一/ 般に流行する俗謠等にて[、]調査の上は、各婦人より/ 聞取りたるものを 綜合 して、一個の著書と［な?］し[、]以て/ 世界に發表する筈なりと

21）ブロニスワフ・ピウスツキ。

参考文献

井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」、加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸文化の研究』[『国立民族学博物館研究報告』別冊5] 45－65頁所収 (1987)

井上紘一「B. ピウスツキと北海道：1903年のアイヌ調査を追跡する」、井上紘一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11－31頁所収　札幌：北海道大学スラブ研究センター (2003)

沢田和彦「ブロニスワフ・ピウスツキ日本暦」前掲書145－172頁所収

能仲文夫「盲目の老メノコは泣く」、能仲文夫『北蝦夷秘聞：樺太アイヌの足跡』 1－18頁所収　大泊：北進堂 (1933) ；復刻版『樺太アイヌの足跡』東京：第一書房 (1983)

函館市史編纂室編『函館市史　年表編』函館：函館市 (2008)

バチラー「珍客來(ちんきゃくき)たる」、ジョン・バチラー『ジョン、バチラー自敍傳：我が記憶をたどりて』第二十章三 288－290頁所収 東京：文録社 (1927)；村崎恭子校訂再版『ジョン・バチラー自叙伝：我が記憶をたどりて』札幌：北海道出版企画センター (2008)

パワシュ＝ルトコフスカ、エヴァ、アンジェイ・ロメル共著　柴理子訳『日本・ポーランド関係史』東京：彩流社 (2009)；原著 Ewa Pałasz-Rutkowska i Andrzej T. Romer, *Historia stosunków Polsko-Japońskich 1904-1945.* Warszawa: Wydawnictwo Bellona (1996)

菱沼右一・葛西猛千代・西鶴定嘉共著『樺太の地名』豊原：樺太郷土會 (1930)；復刻版 東京：第一書房 (1982)

ビルドスキー「樺太アイヌの状態」『世界』26号57－66頁；27号42－49頁 東京：京華日報社 (1906)

Anonym, "Wyjazd Al. Piskora do Japonii [Al. ピスコル日本へ出発]," *Prosto z mostu* nr. 1: 12 (January 1, 1939)

Janta-Połczyłski, "U Polaków na Sachalinie [サハリンのポーランド人歴訪]," in: A. Janta-Połczyński, *Ziemia jest okrągla* [地球は丸い]. Str. 241-298. Warszawa: Rój (1936); [a selected English translation by A. F. Majewicz] A. Janta-Połczyński, "Shirahama and Shiraura," in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronisław Pilsudski.* Vol. 3, Appendix 3. Pp. 731-744. Berlin and New York: Mouton de Gruyter (1998)

Paszkiewicz, M., "Piskor Aleksander (1910－1972)," *Polski Słownik Biograficzny* [ポーランド伝記事典]. Tom XXVI/3, zeszyt 110, str. 554-555. Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk-Łódź: Polska Akademia Nauk (1981)

Piskor, A., "Pierwsze wrażenia [初印象記]," *Prosto z mostu* nr. 27: 2-3. Warszawa (July 2, 1939)

Piskor, A., "Wenus w kimonie [和服のヴィーナス]," *Prosto z mostu* nr. 33: 4-5. Warszawa (August 13, 1939)

Piskor, A., "Dai Nippon banzaj! [大日本万歳]," *Prosto z mostu* nr. 35: 4-5. Warszawa (August 27, 1939)

Piskor, A., "Kolonja polska w Japonji［日本におけるポーランド人コロニー］," *Dziennik Polski* nr. 907: 2. Londyn (1943)

Sieroszewski, W., *Wśród kosmatych ludzi*［毛深い人たちの間で］. Warszawa: Rój (1927); "Wśród kosmatych ludzi," in: Waclaw Sieroszewski, *Dziela.* Tom XVIII (Varia). Str. 219-274. Kraków: Wydawnictwo Literackie (1961); [an English translation by A. F. Majewicz] W. Sieroszewski, "Among hairy people," in: A. F. Majewicz (ed.), *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski.* Vol. 3, Appendix I. Pp. 661-699. Berlin and New York: Mouton de Gruyter (1998)

（いのうえ・こういち　国際言語学部教授）